

The Gallery voice

NO-51

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2012.11.23
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haeburucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

It's about me, It's also about you.

照屋勇賢

今回の展覧会は、沖縄での2回目の個展になります。日本復帰40年がテーマで企画された展覧会ですが、そのテーマへの美術表現でなにが可能なのか。その模索はオープニングが明日に控えた今も続いています。

今回、2009年からシリーズで始まった、「英雄たち」の、ウルトラマン、昭和天皇裕仁、オバマアメリカ合衆国大統領、瀬長亀次郎、安室奈美恵などの肖像作品から、沖縄未発表作品を紹介。

このシリーズでの試みは、紅型で現される歴史上の人物や出来事は、型紙になり、紅型の配色をほどこされることで、肖像や、言葉も、生まれ変わることです。そして琉球の美意識によるステートメントであるために、紅型の伝統美が作品の中で成立していることです。

そして、今回の展覧会のための新作は、県民大会を報道する新聞などから影響を受けた作品になる予定です。

「It's about me, It's also about you.」

(私のことであり、あなたのことです)

「There is a truth bigger than geopolitics」

(政治問題より大切な真実がある)

政治的枠組みから解放されて、等身大で相手へ対話していく、理解していくことの積み重ねが、最終的に正しい判断を民衆が選んでいくプロセスだと信じます。上の言葉二つのタイトルの作品は、ヨーロッパ滞在中に目にした、琉球新報紙と沖縄タイムス紙の県民集会を伝える新聞から影響を受けた作品です。

9月9日、2012年の沖縄の県民大会は、中東で発生した、「アラブの春」と、「占領せよ」運動へとアメリカ合衆国にすら影響をあたえている民主化要求の抗議活動と同じムーヴメントであることを再認識させられるものでした。

同時に、沖縄の問題は、国内だけの問題、または、沖縄とアメリカ合衆国との間だけではなく、世界と直接つながっている問題であることも忘れてはいけないと感じさせられました。

今回は、上にあげた二つの言葉を、アラブ語、ヘブライ語、バスク語、グルジア語、と訳した言葉を新聞紙上の県民大会に集まった人々の写真の上に透けさせられないかと想像します。

人としての生活の基本や人間性を勝ち取り、守ったりする権利は、国境でわかるものではないはず。個人の等身大の高さで、世界からのまなざしが沖縄にそそがれていること、そして沖縄からも、等身大の高さで、世界に対話していく姿勢を作品で表現できないか、思考錯誤しています。

沖縄の米軍基地のアメリカ合衆国も、多くの人権運動によって、基本的人権を国民みずから、獲得してきた歴史で、今もその基本的人権の戦いが続いています。



「Obama」

119.5 × 185 cm 麻布、紅型染 2010年

僕はアメリカ軍の基地がなくなった沖縄の姿を具体的に想像しようと努めています。とても難しいです。それは、僕が生まれた時、40年前からすでに基地があったから？いや、もしかしたら、基地の中をもっと自分の等身大の高さで、みてなかっただけだったのかもしれない。基地の向こう側の、同じ人の生活。共通の問題など。解決にウチナーから提案する機会があるかもしれません。

基地後の沖縄の姿の想像力は、基地を飛び越え、今までの押さえつけてきた、植民地的構造を解体する道具になるはず。その道具のデザインのヒントは、世界と沖縄との関係の自覚であったり、琉球の先人から伝わる知恵であり、人としての交流だと信じます。それらは40年間、すでに目の前に存在していたかもしれないと、そのヒント探しへの模索の紹介が、展覧会の姿を形成していきます。展覧会中も模索作業が成長していくことを願っています。

(てるや ゆうけん/美術家)

世界に向けて沖縄を発信する

翁長直樹

2012年6月下旬から7月下旬まで1ヶ月間、ニューヨークで沖縄の戦後美術の展覧会を企画した。県内とアメリカ系沖縄アーティストによる約40点を展示した。日本クラブという非営利団体の全面的な支援で可能になった展覧会であったが、その中に照屋勇賢も参加し、新作、旧作を取り混ぜて発表してもらった。「モーキティクヨー・・・」、「カラー・ザ・ワールド」「Minding My own business」(できることから始める)(新作)の3点である。彼はニューヨークでは個展、あるいは現地の人とのグループショーは数多くやって来たが、沖縄系だけの展覧会での出品、しかもニューヨークということで、これまでとはスタンスが異なっていたと思う。ニューヨークで沖縄を見せる、その中に照屋の作品があるのは、二重の意味で感慨深いものがあった。彼が一身に背負って世界に向けて表現している沖縄と、表現すべき世界との関係が見えたのである。彼は明らかに、沖縄や日本をはじめ、異なる他者(世界)にむけて表現しているのだということであった。

さて、前回の個展から3年たったという。テーマはヒーローシリーズであった。前回の続きとその発展した紅型の展示である。

3年前は沖縄を主体的に打ち出した歴史上の英雄たち、尚寧王、瀬長亀次郎、具志堅用高、安室奈美恵等が展示された。

今回はもっと踏み込んで天皇裕仁、ウルトラマン、オバマ大統領などが紅型で染め直され展示されるという。

3年前、鳩山首相が米軍基地移転を「最低でも県外」と沖縄の人々に希望を与えたが、先日同じ政権党の党首が衆議院の解散宣言を行った。相も変わらぬ沖縄内の状況に関わらず、尖閣諸島とセットのような歴史教科書の八重山での問題、オスプレイなど、かえって、難題が押し寄せる。さらに米軍人による事件。

基地の壁は厚い。繰り返される事件や事故。普天間の基地の辺野古移転計画と反対運動はつづく。照屋勇賢はそれら一連の沖縄を巡る情勢については、知っており、米国での反応も良く知っている。沖縄問題が日本でほとんど広がらないように、残念ながら米国での沖縄はほとんど報道されない。しかしアートの可能性を信じる。朝日のインタビューでこう答えている「作品を通して意思表示をしたり、会話が生まれたりする。政治のぶつかり合いで行き詰まる場にこそ、芸術という曖昧(あいまい)な世界が入り込む余地がある」

しかしながら、政治が生にぶつかる領域では、きわめて危険な技にも見える。その危うさの先端をバランスをとりながら進んでいくのが照屋の持ち味でもあろう。占領状態にある沖縄という場所でいかに読みとられるのか、試される場所でもある。

紅型による英雄シリーズの中にオバマを加えた理由はマ

イノリティーの復権から全体の代表へというヒーロー像がそこにあるといえる。

現代美術という手法を使って、世界に向けて沖縄を発信するため今回二つの手法を取り入れている。伝統的手法である紅型の流用と、マクルーハンの言葉を借りれば、「クール」で相手の入る隙を作るポップアートの手法により、こちらのことを考えさせることである。プロパガンダアートでは、現代美術ではアートして認められないので広がらないのは既知の事実である。しかしこの手法は先述した危うい面を持っている。抑圧者自身には手法として受け入れられるが、非抑圧者には受け入れることのできない敗北感となる。照屋は世界に向けて、他者に向けて自身の思想と沖縄を表象することを詩的な感性で造形に結びつける。



「Hirohito」 57×54.3cm 混紡布に紅型染 2012年

紅型という伝統的な染色技術を使って伝統的なモチーフの中に昭和天皇が紛れ込んでいるという非常にアンビバレントな表現は、先週の天皇来沖と相まってタイムリーとも言える。それが対面にあるウルトラマンがセシウム光線を放つ。「アトミックサンシャイン」はかつて占領軍が日本側に放った言葉であるが、照屋はそれをユーモラスに沖縄側から日本へと逆照射する。

今月の大統領選で2期目となったオバマも紅型の草花に包まれて沖縄とリンクする。オバマが大統領になる50年前、1963年、キング牧師が有名な演説の中で20数万の聴衆に向かって、本展のタイトル「I have a dream」と述べた。

その言葉をあえて使ったところに、照屋の本展覧会に対する強い意志が込められているといえよう。

(おなが なおき/美術評論家)

ポジティブな未来をイメージ

宮城 潤

仲井眞県知事をはじめ、県議会、全市町村長が反対を表明し、県民大会には10万人を越す県民が参加したにもかかわらず、県民の声は無視され普天間基地にオスプレイが配備された。配備直後から市街地上空をヘリモードで飛行している姿が目撃され、日米政府への不満が募る中、度重なる米兵による暴行事件。実効性のない再発防止策に県民の怒りも頂点に達している。

戦後、米軍による統治から沖縄の施政権が日本に返還された「本土復帰」から40年の節目にあたる今年は、様々な場所、機関で「復帰40周年」の催しが開催されている。「本土復帰」の1972年に生まれた私は、当時のことは全く知らない。翌年の73年生まれの照屋勇賢も同じである。私たち復帰後生まれの世代は、当然ながら復帰当時の状況を体験としては持っていない。が、しかし、日本本土とは異なり、復帰後も駐留し続ける米軍基地とそれに絡む事件・事故のあまりの多さに、憤りを禁じ得ない。

「構造的差別」といわれる沖縄と本土の温度差に違和感を覚え、私たちが背負わされている問題を伝えるにはどう表現すればよいのか、また、どのように解決していけばいいのか、を考え続けている。

2002年の「VOCA」展で奨励賞をとった『結-い・YOU-I』は、伝統工芸である紅型を初めて利用した着物の作品だ。ヒーローシリーズへと展開することにもつながるこの作品は、紅型の伝統的な意匠をベースに戦闘機やパラシュート、海を泳ぐジュゴンとその上を飛ぶオスプレイが混入している。一見すると伝統的な美しい紅型の着物だが、よくみると豊かな自然と色鮮やかな文化の中に基地の存在が入り込んでおり、現在の沖縄の姿が凝縮されている。

照屋の代表的な作品のひとつとして評価されているこの作品も、制作段階では相当苦労したようだ。当時は、現代美術に伝統工芸の技術を取り入れることに対して理解してくれる人は少なく、また、基地をテーマにすること自体がタブーとされている状態でもあった。制作パートナーとなる紅型職人、金城宏次氏が理解し、協力してくれたことは大きい。

照屋の作品の特徴として感じるのは、現代社会に潜む様々な違和、ズレ、を視覚化し、問題を顕在化させながらも、鑑賞者にその問題を突きつけるだけではなく、そこからポジティブな未来をイメージさせることにあるように思う。

昨年3月11日に発生した東日本大震災とそれに伴う原発事故は、日本中そして世界中に大きなショックを与えた。そのなかで、アーティストやアートに関わる人たちは、アートができることを模索していた。そういう状況の中で照屋がつくった『Minding My Own Business』

は、被災状況を知らせる新聞記事から太陽に向かってまっすぐ芽が生えているという作品だ。津波と海水と土砂が混ざりあった土地から、次への再建が始まっている希望を表している。

また、この作品は「未来の芽、里親プロジェクト」という市民主導のプロジェクトに発展している。それぞれの芽の里親になる権利を販売し、権利を買った人々がこの作品を共同購入して美術館に寄贈する。販売で集められた資金は、東日本大震災の支援金として役立ててもらおうというものだ。作品をつくるだけではなく、それが社会とどのように関わり、何が生まれるのか、そのためのシステムをどう構築していくか、ということも視野に入れている。



金城宏次紅型工房で作業する照屋（右）と金城（左） 2012年11月

「基地問題」をはじめ、沖縄には解決の糸口がみつからず、立ち尽くしてしまう現実がある。様々な矛盾があるし、憤ることも多い。

「本土復帰」を経験した世代は、激動の時代を知っているだけに、表現もストレートだ。理不尽な状況に対して怒りをぶつける。しかし、怒りを基調にした表現は強く私たちの感情を揺さぶるが、それだけではこの社会は変わらない。具体的に、現実的に、この社会を変えていくためには、ビジョンが必要だ。

ビジョンはポジティブなイメージから生まれる。

照屋勇賢は、アーティストとしてそのイメージを提供する役割があることを自覚している。

「I have a dream」という照屋はどんな夢を持っているのだろう。

アーティストの夢は、ときには私たちの想像力をはるかに越え、理解しづらいこともある。しかし、現実化した作品と対峙することで、そのイメージを共有することができる。今後も照屋勇賢がつくるポジティブな未来のイメージとして作品を見続けていきたい。

(みやぎ じゅん/元前島アートセンター代表)

YUKEN TERUYA



照屋勇賢について

今年が復帰40年の節目。この復帰という同化政策のなかで、明治の琉球処分(?)以降の同化政策とは時代背景が異なるものの、「同化」は沖縄社会にどのような変化をもたらし、どのような課題が噴出し、これからの未来社会にどのようなビジョンがもてるのか。画廊側から各世代の写真を含む美術家に企画展へ参加してもらった。

今回の第4弾は復帰っこ世代で国際的に活躍する現代美術家、照屋勇賢氏の登場となった。照屋は1973年南風原町津嘉山生まれ。多摩美術大学美術学部絵画科卒業(1996年)。その後渡米し、スクール・オブ・ビジュアルアーツMFA大学院ファイン・アーツ科修了(2001年)。同大学院修了後、ニューヨークに拠点を構え活発な制作と発表活動を続けている。

照屋のデビュー作とも言える「Notice Forest (告知一森)」(2002年)は世界のアートシーンに知られ、YUKEN TERUYAの名を知らしめた。現在では照屋のさまざまな作品が世界の有数の美術館に収蔵されている。コンテンポラリーのアートシーン「横浜トリエンナーレ」(2005年)、「モスクワ・ビエンナーレ」(2011年)、「シドニー・ビエンナーレ」(2012年)、などの国際展に招待出品する作家となり、多忙を極め、世界各地のアートショーや個展のため世界中を飛び回る日々をおくっている。

今企画展においてもドイツの90日間のアートレジデンスをこなし、数日前に沖縄入りして展示会に臨んでもらった。今展をセッティングすると疲れをいやす間もなく、東京へ飛び、12月1日より始まる、二つの画廊の個展が待っている。「勇賢さん大丈夫・・・」と老婆心ながら声を出してしまう。

復帰っこ世代の現代美術家の照屋は郷里を離れ米国

のニューヨークに10数年余生活している。社会性の濃い作品を数多く発表してきた。照屋が故郷沖縄の復帰40年の節目をどのように受け止め、アートでどう提示するのか興味深い。

本号GV紙の1項に照屋は「・・・40年前からすでに基地があったから?いや、もしかしたら、基地の中をもっと自分の等身大の高さで、みてなかっただけだったのかもかもしれません・・・。」と述べている。同世代のごく一般的な眼差しと大して変わらない。しかしながら彼のこれまでの作品が示すように、外国に生活していても状況と場の問題はネットなどを通して情報は得ており、その「状況」は十分理解していると思う。「軍事基地植民地」の解体と基地跡地の展望を、アートで沖縄の未来のビジョンをたぐり寄せることが出来るのか・・・苦闘している。

1995年の米兵による12才の少女暴行事件は、復帰後の大きな沖縄県民大会(8.5万人)をおこし、政治的にも軍事的にもこの場が「日米の軍事植民地化」していることを明確に浮き彫りにした。それ以降、次から次へと浮上してきた「教科書の集団自決改ざん問題」、「辺野古基地建設問題」、「防衛庁の県庁守衛室資料投げ込み事件」、「普天間返還問題」、「オスプレイ強行配備」、止まらない占領意識丸出しの米兵の暴力事件。それらは市民の尊厳と誇りを足で踏みつぶす「蹂躪」そのもので県民世論が島ぐるみの闘争の予感がする。このような状況下の郷里沖縄の「不条理」を外国で生活する美術家はどのような感覚で受け止めているだろうか。今展の企画者として大きな関心を寄せるものである。

今展では、3年前のヒーローシリーズの新作「ウルトラマン」、「ヒロヒト」と沖縄で未発表の「オバマ」が展示され、沖縄と日本、日本と米国、米国と沖縄のトライアングルの構図が読み取れる空間となった。現実の政治的構図の関係性と、その奥底に潜む「構図の本質」が、YUKEN アートによって、実にクールでポップアート感覚を伴って可視化された。しばし画廊空間にたたずみ、画面に向き合う事で、状況と未来ビジョンを往還する自己の内面に会おうであろう。

さらに、今展では、去る9月9日の「オスプレイ反対」の10万人余の県民大会の新聞紙面(琉球新報と沖縄タイムス)に衝撃を受けたと言う照屋は、この問題をテーマに言葉で「It`s about me, It`s also about you.」のメッセージ作品を制作した。その言葉を世界各地の言語で、広く世界に発信すべく新聞紙を使用した新作のインスタレーション作品を発表する。

結びに滞在が一週間ほどしかない多忙を極める照屋が、紅型工房の金城宏次氏の協力のもと、また照屋の仕事リスpektする若いサポーターの皆さんの協力によって、開催にこぎ着けたこと。また新聞の切り込みの仕事が「一般参加型アート」として自然発生的に生まれたことを記しておきたい。40年の節目に相応しい展示会となった。
(画廊主/上原誠勇)